

Title	米国経済学思潮の今昔（上）
Sub Title	
Author	高島, 佐一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1916
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.10, No.10 (1916. 10) ,p.1467(135)- 1476(144)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19161001-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

るを感ず。今次戦亂に際して非常の低落を來したる爲替調節に就き最も意を致したるも英國なるが、同時に其効果を全うしたるも亦英國なり這は固より英國財力の豊富なるに因るは勿論ならんも、亦英國民が軍國の急に處して能く自制を守り、其財力を適當に按配し、消費の節約、金の蓄積、現送、證券の蒐集、賣却、公債の募

集銀行信用の設定等各種の方策に訴へ其處置の機宜に適したるの結果たらずんばあらず。英國が開戦以來採り來れる是等各種の施設は何れも將來に有益なる教範を垂るゝものと謂ふべし。

終に最近(八月十九日)紐育市場に於ける各交戰國爲替相場を掲げ其低落の程度を示さん。

種 類		相場	平價相場	低落の度合
英 國	電 信	四七六六	一磅に付 四弗八六六六	二・二〇%
佛 國	同	五・九〇	一弗に付 五法一八%	一三・八五
露 國	銀行參着	三〇・六〇	一留に付 五一仙四五	四〇・四八
伊 太 利	電 信	六・四七五	一弗に付 五「リラ」一八%	二四・九五
獨 逸	同	七二五	四馬克に付 九五仙二八	二四・〇〇
奧 匈 國	銀行參着	一二・四〇	一「クローン」に付 二〇仙二六	三八・七九

米國經濟學思潮の今昔(上)

高島佐一郎

近比會、コーネル大學の「哲學評論」The Philosophical Review. の最近號を繰きて、シャウプ教授の試みける、獨逸西南哲學派の代表者たるウンデルバントの最後の著述「哲學概論」Windelband, Einleitung in die Philosophie, 1914. に對する評論を読み、予はシャウプが、ウ氏の此の名著を以てして仍ほ、米國哲學界に入りてより、無前の發達を遂げにし「實際主義」Pragmatismus に對し、僅々數行の行文を以て短評し去れるの憾みを洩らせるを見たり。而して此の疑義は、予自らも之より先き、ウ氏の右著を宗とせる宮本和吉文學士の「哲學概論」を讀

過せる際に亦た、懷抱せるものたりき。(上掲書一八六頁)さはれ、哲學界の事、畢竟予にとりては不關知の一天地たり。然るに時を之と前後し、本邦經濟學界一代の碩學福田先生の最も洗鍊せられたる新名著「改定經濟學講義、第一卷」を心讀して、其の金玉の措辭高邁の識見明哲の論理及び透徹の判斷に接して反魂的憧憬にしたりつつありしに當たり、其の經濟學小史の章の終りに至たるや、愕然として覺えず、シャウプの遺憾を聯想するを、禁じ得ざるものあるに接せり。蓋し是れ、先生が米國經濟學界の記述の爲めには、其の第一七二頁に、僅かに三行の文字を割愛せられたるに過ぎざるを發見せるが爲めに外ならず。

福田先生に於ては自づから別に見らるる所あらん。而かも本邦經濟學界最大の權威者の、評論の草を委曲たらしむるに堪えざるほど、爾かく米國經濟學界の現状は、貧弱なるや否や。此

の點後學予の如きの論辯を用ゐる人よりは、寧ろ却つて先生の奉せらるる篤き、マーシャル教授の記述を以つて代はり説かしむるを適當なりとなすべきか。マ教授は、其の「經濟學原論」第七六六頁に於て論ずる。

The greatest relative advance during recent years is perhaps that which has been made by America. A generation ago, the « American school » of economists was supposed to consist of the group of protectionists who followed Carey's lead. But new schools of vigorous thinkers are now growing up; and there are signs that America is on the way to take the same leading position in economic thought, that she has already taken in economic practice.

と。米國經濟學界の斯學界に於ける地位の低からざる、一讀するものを首肯せしむるに、足らずとせんや。予は實に、近時米國學者の業績の太だ大なるものに接すること頻りにして、今日の米國經濟學界こそ、英國正統學派と獨逸新舊歴史學派との英華を、蒸溜するの埒場とすら、

信するものなれ。

以上は是れ、謂はゆる理論的經濟學思想の談に係かる。若し夫れ謂はゆる政策的經濟學の論義に至たりては、近世米國經濟學界は實に非常なる貢獻を爲せるものなる、争ふべからず。蓋し此の種の經濟學思潮の進化發展たる、大凡そ外界包圍事情に支配せられざるはあらざるに、四圍事情の進化の甚しき、北米合衆國の如きは尠なければなり。此の點、またマーシャル教授の説けるが如く、米國の現在及び將來の經濟問題たる、貨幣金融投機企業合同關稅等の解決こそは、正さに米國が世界に對して、其の「バイオニア」たるの地位を、要求するものならん是等の學田に於ける米國學界の業績の赫灼たるものある、蓋し當然なりとす。

予は斯かる意味に於て、政策的經濟學の米國學界の業績は、殆んど説舒するの要を見ずとし、唯だ理論的經濟學の領域に於ける其の進化發展

を記述するの、必ずしも無用の論索にあらざるべきを信するなり。而して本稿を草するに當たり、始終之を宗として宛然之が種子本たる如きの資料を供給せるものは市俄古大學教授デュー・ローレンス・ラフリンの、「産業の米國」第七章「合衆國に於ける經濟學上の思索の現在地位」にして、予の創意を添綴せる所、太だ鮮なし。ラフリンの右著は、往年、現獨帝の援助の下に企てられたる、米獨交換教授の一先達として、獨逸に派遣せられたるラ氏が、伯林大學生の爲めに試める、講演の一部たり。其の所論必ずしも新しとなさず、依つて若干の補正添綴は此の起稿に當たりて免かれ難き所なりき。篤學の讀者幸ひに進みて右の「Industrial America」福田博士「改定經濟學講義第一卷」補論其三「マーシャル教授「原論」の Appendix B. and J. を心讀すれば、得らるる所、蓋し太だ大いなるべし。

今日の米國を生める其の獨立宣言は一七七六年に宣せられしが、英國經濟學の今日あるを得しめたるアダム・スミスの大著「國富論」Adam Smith, An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations の出でたる、亦た會ま同年にあり。奇縁必ずしも無からずと云ひ難し。爾來悠久たる一百歳、米國學者の頭腦によりて一の權威ある文献の、經濟學説上に加へられたるものあるに接せず。かのウェーランド、アマサ・ウォーカー及びペリーの小冊子 (Wayland, 1837; Amasa Walker, 1866; Perry, 1866) は、皆な悉く、多少とも、英國經濟學思潮を反射したるもの以上に出づる能はずして、創作を以つて許さるべきにあらず。わが福田博士が「今日までに生じたる最大の米國經濟學者」と斷じけるケリーの、最も特色ある著述「社會學の原理」Henry C. Carey, Principles of Social Science に至たりては、前代の米國學者の何ん人の著作よりも、

歐洲學界に於ける一層大なる注意を喚起する所ありしと雖も、渠を試みたりし、リカードの地代説及びマルサスの人口論に對する反對は、マール教授が指摘しける如く、一にケリーの誤解に胚胎せしものに外ならずして、リカードの學説を搖かすに足らずと認めらる。加之、時人は亦た、渠の貨幣、價值に關する學説、又は福田博士が「其の重なる事功」と許しける保護貿易に關する論策に對してすら、創唱の名譽をケリーに與ふるを吝しむに至れり。唯だ茲に注意すべき一事は、マール氏が、ケリーの外國貿易政策眼の、果して、之より先き「フィラデルフィア」に永く放浪して保護貿易の爲めに虹霓を吐きたりしフリードリヒ・リストの感化に、成りたるものなるや否やに就て、克く斷言せざることなりとす(see Marshall, op. cit., pp. 164, 767) ケリーすら、仍は然かり。況んや Franklin, Hamilton, Gallatin, Calhoun, Webster, Lowndes, Be-

nton Clay 及び Chase の如き政治家論客に至りては、米國經濟學に何等の貢獻を加へたるものなく、單りハミルトンの一天才ありて、學的に幾分の威重を示せるにすぎず。

米國に於ける經濟の學田の此の礎確は、試みに歐羅巴に於ける同時代に輩出したるマルサス、セイ、リカード、シスモンデ、セニオル、フォン・チュネン、ラウ・クルノー、ヘルマン、ヒルデブランド、クニース、ロッシャ、シェーフ、マルクス、ミル、ケアネス、メンガー、ワグナー、シュモラー、ブレンタノの如き碩學鴻儒の彬彬たるに、比較し來れば、轉た寂寞の覺えずんばあらず。此の學的成果の貧弱は、そも果して何くに據れる。之を米人の能力の闕如せる、將た經濟學研究に不適當なるに歸するは當らず。其の社會現象の單調にして實際問題の欠缺せるに歸するも、亦た當らず。米國に特有なる黨派政治が絶えず、民人を黨争の渦中に驅り

上下をして選舉の奔命に疲れしめたるによるとするも、當を失す。況んや熱狂を極めたる奴隸解放問題に没頭するの、遂に經濟理論の創造的研究を妨げたりと云ふに於てをや。げにや、米國國家生活の第一世紀を通じて、其の經濟學研究の不成熟なりし所以のものは、之よりも仍は一層深き根柢を掘り起すにあらざれば、終に發見するを得ざるべきなり。何ぞや。曰く、吾人が唯だ一途に廣漠にして豐饒なる國土國富を征服するに熱中し、且つ多岐多端なる實際問題の發生すること頻りにして、國を擧げて其の俊傑の頭腦を之に傾け盡すも足らず、爲めに其の他の學問と共に我が經濟學の原理原則を討尋するの業は悉く後日の事業として閑却せられたるによる。之を要するに、わが外界包圍の性質こそ約四十年前に至たるまで放棄し去られたる、學問的貧弱の所由を充分に辯明するものたらざるを得ず。蓋し文化の、植民地に燦然たる、須ら

く天然征服の業成り、社會生活の整頓するを俟つて、始めて之を期し得べきものなればなり。

讀者幸ひに此の項に興趣を湧かし、一層深き研究を積まんと欲せば、庶幾くば、一七七六年至一八七六年の一世紀に亘たる、米國經濟學の經紀を述ぶること頗る詳かなる、故ダンバー博士の「經濟學論文集」——スプレーグ教授の編輯せる——の一節を繙かんことを。(Charles F. Dunbar, Economic Essays, pp. 1-30)

三

翻つて今日、米國經濟學界に横溢せる至高の智識的醗酵及び批評的活動を顧みれば、何ん人も前時代に於ける萎靡不振との、對照の太だしきに驚異せざる能はず。果然「搖り動がされたる樹木は一層豐饒なる果實を結ぶ」の古言の、吾人を欺かざるを知るなり。南北戦争によりて米國の國民心理は未曾有の變革を蒙りたりしが新聞紙の普及、鐵道電信の發達に連れ、米國人

は思潮は茲に地方色を離脱して、凡そ國家的重要の問題に觸接するに至たり。げに米國民衆は茲に悉く國家的大問題に活眼を開き來れるなり。即ち南北戦争の結果は自づから、米國上下の注意を驅りて租税、關稅、貨幣、金融、國債等、凡そ前代にありて夢想だも爲さざりし、大規模の財政、經濟問題の解決に向はしめ了んぬ然るに惜むべし、永く狹隘なる地方的小天地に踟躕したりける米國の學問界は、斯かる國家重大の問題の發生し來たるも、克く之に應酬して世界的眼光に照らし又た歐洲先進國の事例經驗に基づき、適切妥當なる立法に伴はるべき、實際政策を、論定し樹立するに耐ふるの、經濟學者の闕如たるを暴露したりしことを。幸ひにして境遇は人を造り必要は人材を生むの因果律の作用するありて、暫くならざるに國家須要の學者は彬々として輩出し來たり。即ち國內稅制調査委員にして關稅改革顧問を兼ねたるウエル

ス David A. Wells 自由貿易論、貨幣問題及び統計に關する一代の著述家たりしアトキンソン Edward Atkinson 熱烈なる自由貿易論者にして幣制上に一隻眼を有しける「エール」大學のサムナー William G. Sumner 金融及び銀行問題に就き該博透徹の識見を具へたる「ハーヴァート」大學のダンバー Charles F. Dunbar 國勢調査法の創始者にして貨幣、貨銀及び企業利潤論に通曉せるウォーカー General & Francis A. Walker 並にヘンリー・ヂー・ジョージ Henry George 一派の政論家等の人材は、此の國家の急需に應じたる俊秀にして、米國經濟學界の元老と呼ぶも溢美にあらずとす。

一八八〇年以降に至たるや、新進の經濟學者踵を接して輩出したるが、其の大多數は皆な獨逸に留學したるものなれば、經濟政策上に國家干渉の妥當なる將た經濟的因果律の發見に歴史的研究法を用ふるの適當なることに關し、獨逸

學風の感化を受けること甚だ多し。就中、ヂー・ビー・クラーク J. B. Clark イリノイ R. T. Ely アダムス H. C. Adams デー・ハムス E. J. James セリグマン E. R. A. Seligman ベン・テン S. N. Patten デ・ハックス J. W. Jenks 故メエヨ・スミス R. Mays-Smith は其の重なるものなり。是等の中老諸教授の學風たる、一言之を蔽へば、英國派經濟學の蘊蓄大幹に對し、獨逸歴史學派の精髓てふ強固なる枝を接ぎ穂せるものに外ならずして、新らしき學田に移植せられたる今まは勢ひ、搖がざるの磐根を下ろし以て麗花美果を着けざるを得ず。米國經濟學界が爾來潑潑清新なる研究振りを發揮せる、蓋し所以なしとせざるなり。此の獨逸の思潮傾向の注射せらるゝや經濟論策上遽かに世界的特性を帶び來たり、動もすれば英國一點張りの狹量卑陋に墮せんとするの風潮を除き去れり。今まは共に故人たるフランス・ウォーカー及びヘンリー・ヂー・ジョージの

如き二三の元老學者と共に、此の一群の中老派の碩學の、著述を窺へば、雷だに英國學統の大成せりし經濟學體系に對する反動を示すに止まらず、進んで其の正反對に至たらんとする強き運動あるを看取すべきなり。而して斯かる反動的運動の成績の幾何くが、果して經濟理論の全體系に貢獻し來たるべきかは、今後に於て解答せらるべき問題に屬すと雖も、とにもかくにも此の最近數十年間に顯現したりける經濟學思潮の變遷こそ、經濟論争上に強き刺激を齎したるは、喋々を須ひずとす。今ま此の歴史學派を正統學派に接枝するにより、「フロリスト」の試むるが如く別箇の果實を結び得たらしめたる成績を約言すれば、舊人の思想が人性を一定不動のものとして看做せるに反し、新人の思潮が人性を外界包圍事情に支配せらるべき可動のものとして爲せることなり。約言すれば自然科學に於ける進化論を攝り入れ、生物學に於ける優生論を攝取し

たることなりとす。

さはれ、經濟學思潮を論ずるに當たり、全然民族的特性又は傳說的勢力を看過する能はざるは言までもなし。外國の觀察者にして若し今日米國の經濟學田を通覽し、其の耕耘の傾向と收穫の成果とを考察したらんには、必ずや外國思潮よりせる輸入思想の強力なると共に、遺傳せられたる「アングロ・サクソン」的思想傾向の勢力の猶ほ強大なるものあるを、認めざるを得ざるべし。否な寧ろ、英國學風の正系に溯るべし。てふ明白なる傾向が學田の全部に鬱勃たるを見出さん。斯くて米國經濟學派を創めんとするの努力熾んなるなり。批判家若し自ら戰慄に近づくこと甚しければ、恐らくは全戰況を判知し難く隨つて結論を疑はん。されど米國に於ける經濟學研究の始期(大率一八七八年)より現今に至るまでの、約四十年間に於ける學風の推移を心平らに觀察する所あらば、米國經濟が必ず

しも決して獨逸學風に侵染し了れることを否認せずんばあらず。

米國産業生活の不斷の精進力の裡にも亦た、わが經濟學法の由つて來たる所以を發見し得べし。既述せる勢力の湊合の中より、明かに米國的特性を有する、一の心的傾向は起り來たれり米國には一の權威ある著述家、一の神聖視せらるべき學說、及び古き年所を闡みせる時代付きの威勢の存するありて、其の經濟界の所産物の一片をも、嚴正冷靜の批判より、防護することなし。げにや、根本的改造は方今時務の歸趨たるべし。創作的醗酵作用の旺盛なる、今日の如きは振古見る能はざりし所なり。米國國家生活の第一世紀間の特色たりし、經濟學研究能力の抑制せられたることは、會々専ら、今日に於ける經濟純理發見の熱情に油を注ぐの原因たりしが如し。夫れ學問進歩の要諦は、一方精密なる分析的能力を働かすと共に、他方豊富なる想像

力を傾けて適當なる假説を捻出し且つ之を批判するを急となす。即ち一たび立したる假説も、若し事實の之に矛盾するものあらば、斷然之を棄て更に別種の假説を立て來たるの勇氣と耐忍とを要するなり。斯く想定したる假説を自ら批判し砂壞するに於て、學問は歩一步に大成の域に進む。ニュートンが、吾は假説を作らずと云へるは、學問研究の要道として人の數ば引く所なれども、こは無用の假説を作らず、換言すれば故らに經驗的事實を無視し曲解して空想的を想定せざるべきの意味に、解すべきなり。唯だ其の假説に矛盾あらば、直ちに之を放棄し去るの勇氣あらば足れりとす。翻つて米國經濟學風を顧みれば、盛んに經綸して學説を道ひ假説を立すると共に、過去に成就せられたる學問の一切の集積を擧げて弊履の如く撤ち去りて吝まざるの傾向著しきを發見すべし、此の事實こそ米國學界の思潮が不斷に新眞を追ひ、須らくも固

定せざる所以なるべきか。眞理追求に就て、精進、熱烈、勉強、直情且つ大膽不敵なるは今まや米國の産業生活に於けると等しく、其の經濟學思潮にありても太だ著しきものあり。果然、人性を支配するの外界包圍事情は復た米國人の學問的行程に對し、それが前時代に作用したりけるものとは全然相異なる仕方に於て、影響を及ぼしつつあるなり。曾ては米國の四圍事情は其の富源開發を促すに急にして、根本的な經濟原理の抽象的性質を心長閑かに研究するを妨げたりしに反し、今まは則ち闔國全體の開發せられたる富は、そこに經濟學研究が重要な地位を認められたる、多數の大學設立を促進して科學的考察に至便至大の機會を提供したるものとす。

さりながら彼れとは全く相反せる仕方に於てわが經濟學思潮に於ける學的進歩が、大學の職業的經濟學者の品質及び能力の低下せられたる

によつて、妨害せられたるも亦た、米國の四圍事情の一作用なることを看過すべからず。米國大學卒業者に就き、最大才幹の大部分は、其の四圍事情の促すところ、實際社會生活の興ふる有利なる物質的報酬の爲めに、滔々相率ゐて實業界に投ずるの傾向顯著なるを以て、學究的生活を選定するものは勢ひ、必ずしも決して國家最優良の部分たらざるの、結果を示めし來られるもの、即ち之なり。事實上、今日の所にては大學又は専門學校の教授する地位は、何等高き尊嚴及び名譽を齎さずして、渠等は動もすれば實際界の成功者より輕視せらるるの傾向なしとせず。是れ米國學問界の憂ひたらざるを得ざるなり。總て社會的萬象に時代の彩ざるの添附せられ、人類萬般の行動の價值が貨幣的稱量によりて判定せられ、人類百般の行動が悉く物質的に評價せらるるの、拜金主義緩和せられ、知識界の事業が一層の價值を認めらるるに

至たることは、學問進歩の爲めに、望んで已む能はざる所なりとす。されど、資本家的精神、企業家的精神の最も熾烈に、拜金主義、ビジネス、萬能主義の最も深く浸透せるの米國に於て學問が歐洲大陸殊に獨逸に於て享有しつつある如き取扱ひを受くることは、近き將來に於て望みなきに庶幾し。

批評と紹介

美濃部達吉著『日本行政法』第四卷

大正五年九月東京有斐閣發行
菊版五百十七頁正價金貳圓參拾錢

本書は普通官業又は營造物と稱せらるるものに關する法規に對する著者一流の明快なる解説を載せたり。著者は『營造物』なる法律上の用語が法文に於ても將た又普通の用法に於ても其意義一定せざる事を指摘し、此用語の代りとして公企業なる文字を用ひて關係法規を説述せり。著者の定義に従へば、公企業とは「國家又は公法人が特定ノ目的ノ爲ニ自ら經營シ、又ハ他ノ者ニ特許セル事業ニシテ權力ノ行使ヲ其ノ本質ト爲ササルモノ」にして、其中國家の經營に係るものは官營企業と謂ひ、公法人の經營に係るものは公營企業と謂ひ、前者の例としては郵便、電信、電氣、鐵道、官立學校等を挙げ、後者の例としては市營の電氣事業、給水事業、下水道居場等を挙げたり。著者は此『公企業』なる概念に對して『公物』なる一新概念を設け、之を定義して「凡テ直接ニ公用ニ供セラルル物」とせり。即ち著者の定義に據れば、公道、官

營郵便、電信、電話等に用ゆる一切の設備、官公立學校の敷地、器物、備品等は皆是れ公物なりとす。

要するに、美濃部博士の説に従へば、權力の行使を重大要素とせる陸海軍、租税の徵收、司法、警察、戶籍事務、民業の制裁監督等を除き、總て私人の經營に任じ得る、且つ或る場合には現に任じつゝある事業、例へば交通、通信、運輸、教育、衛生、專賣等を國家若しくは公法人が經營するとせば其の經營の方面より觀察して之を公企業と稱し、各其事業に用ゆる土地、建物、備品等は總て公物と名くものなりとす。公企業と公物との對照をば極端なる一例を以て説明するとせば公道の新設、修築、維持は一公企業にして、道路を構成する土地及其附屬設備は公物なり。

惟ふに、權力の行使を其本質とせざる總ての政府の施設をば經營と設備との兩方面より觀察するは必要なることにして著者が此兩者を二個の異なる概念の下に論議せらるゝは頗る當を得たる處置なりと云ふを妨げざるなり。唯前者を稱して『公企業』となすは聊か經濟學界並に實業界に於ける『企業』なる用語と衝突するの虞れあるを遺憾とせざるを得ず。如何となれば、官公立學校、圖書館の經營、道路の維持等は其目的に於ても結果に於ても一般に企業と稱し得る性質を有せざるを以てなり。

目下問題となりつゝある營造物使用料の法律上の性質に就